

1. まえがき

ブルックナーの交響曲を中心とした作品は、今日の日本でも多くのファンがいますが、彼の作品が世に出るまでの苦労は一方ならぬものがあつたと伝えられています。ここではそのような背景の中で完成し、世に認められたブルックナーの交響曲第4番の誕生の経緯についても、述べたいと思います。

ブルックナーはブラームスと同時代の作曲家でしたが、この二人はしばらく対立関係にありました（後年にはブラームスはブルックナーを認め、彼の葬儀の際には物陰で涙を流したとも伝えられています）。

ブルックナーが作曲した9曲の交響曲のなかで、第3番以降は今日、演奏頻度も高く、評価が定着していますが、その第3番が1877年に初演された当時、ほぼ同時期に敵対するブラームスの第2番の交響曲が初演され、こちらは大成功でした。一方でブルックナーの第3番の交響曲は、同じくウィーンフィルの演奏で作曲者自身の指揮で初演されましたが、それは惨憺たるもので、楽章が終わるたびに観客が帰りはじめ、第4楽章が終わった後に残っていたのは、ブルックナーの弟子であつたグスタフ・マーラーを含む数名という歴史的な大失敗に終わっています。

ブルックナーの交響曲第4番はこの出来事の前年の1874年にすでに一応の完成をみていました。しかし、この出来事の影響もあり、もう失敗は許されないと追いつめられたブルックナーは、何とか自身の作品を理解してもらうために、この曲の根本的な改訂を行っています。その努力は「ロマンティック」という副題や、各楽章の曲目解説にも表れています。

2. ブルックナー自身による苦心の曲解説

「ロマンティック」という副題は、ブルックナー自身がこの交響曲第4番につけたものです。「ロマンティック」の意味は18世紀の文学者のシュレーゲルが、均整がとれた格調高い古典的なラテン語文学（クラシック）に対して、中世の時代、冒険や恋愛を含む騎士物語などが、俗語であつたロマンス語で書かれていたことから、こうした要素を持つ文学の総称として「ロマンティッシュ」と表現したことによります。さらにブルックナーは、この作品について以下のような説明を加えています。

第1楽章 中世の街の夜明け。町の庁舎から一日の始まりを告げるラッパが聴こえる。森に分け入り、木々のざわめきや鳥の声を聴く。

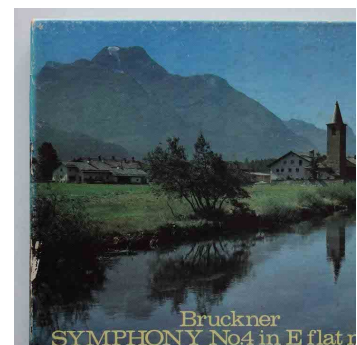
第2楽章 歌、祈り、夜の情景。

第3楽章 白馬に乗った騎士が狩りのため、いきおいよく城から駆け出ていく。トリオでは狩人たちが森の中で食事をし、手回しオルガンに合わせてダンスを踊る。

第4楽章 盛大な村の祭

この第4交響曲は彼の交響曲中、表題が付いている唯一の作品です。また流麗で親しみやすい旋律が豊かに盛られています。ブルックナー自身の苦心作ともいえる解説の効果もあり、現在ではとても人気の高い作品となっています。この「ロマンティック」交響曲の演奏会のチラシや、CDのジャケットには、中世の城などが登場するものもあり、そのイメージから入る人も多いと思います。

この作品には、どの楽章にもどこか中世騎士物語的な雰囲気が漂っていることは確かですが、これはブルックナーが作品を改定する過程で、彼の説明のイメージ「中世の城、白馬の騎士」にある程度添うように、



CDのジャケットに描かれた中世の風景

曲そのものにもかなり手を入れた結果ではないでしょうか。

大衆受け狙いと言えばその通りかも知れませんが、この「ロマンティック」交響曲の初演の成功が無ければ、ブルックナーの作品が後世に伝えられることは無かったかもしれません。至宝とも言えるブルックナーの芸術は、永遠に忘れ去られたでしょう。しかし、このブルックナー自身の解説は文面通りに受け止める必要はないでしょう。

この「ロマンティック」交響曲の各楽章を聴きこんでいくと、そのような皮相的なイメージはいつの間に剥ぎ取られ、ブルックナーの深淵な世界が広がります。特にこの曲の白眉である第4楽章はブルックナーの解説にある「盛大な村の祭」では到底説明できません。

曲中に現れる凶暴な嵐や、温かな日の光などの描写とも感じられる部分からは、アルプスのような雄大な自然の姿を連想してしまいましたが、ブルックナーはそれ以上のものを描こうとしているのでしょう。

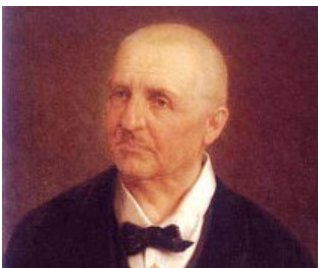
この長大な第4楽章は、冒頭からブルックナー色が満載で、暗い情念と祈り、淡く美しい歌に満ちています。特にコーダーで弦楽器群が奏でる神秘的なトレモロを背景に、金管が教会でのコラールのように歌い上げる個所はまことに神々しく、格別な高揚感があります。



アルプス山麓のイメージ

この曲でブルックナーの本質的な魅力を理解してしまえば、「ロマンティック」といったような親しみやすい解説の無い、第5番以降のより充実した作品群についても、理解が容易になると思います。

3. ブルックナーの人物像（不器用な天才）と音楽



ブルックナーの肖像画



聖フローリアン修道院



ブルックナーの部屋

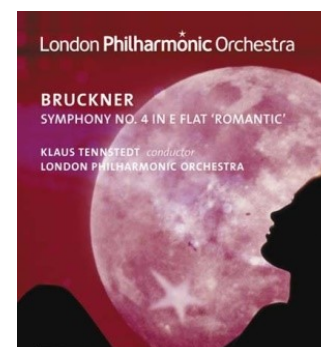
オーストリアの片田舎に生まれたブルックナーは、修道院の聖歌隊で地道に音楽を学び、やがて壮麗な聖フローリアン修道院のオルガン奏者の職も得ました。その一方でシューベルトの交響曲などへのあこがれもあり、作曲を学び続け、44歳で音楽の都ウィーンにやってきました。

しかし伝えられるエピソードには残念なものも多く、その音楽から想像される崇高な人物像からは、全くかけ離れた印象の人だったようです。例えば流行とはまるで無縁な田舎紳士風で、オルガン用のダブダブのズボンを履き、田舎訛り丸出しといった有様で、コミュニケーションも全く不得手でしたので、周囲は変人扱いをしたようです。音楽以外は何事も不器用だったのでしょう。

ウィーンでは音楽教師として働きながら、彼の目指す交響曲を書き続けましたが、社交性は皆無で、交友関係もあまりなかったようです。

昨今ではシューマン、ショパンなど有名な作曲家の伝記などを基にした映画が数多く作成され、ロマンスに溢れた魅力的な人物像が楽しめますが、ブルックナーに関してはこのような映画はまず無理でしょう。

また、ブルックナーの音楽は「月が突然落ちてきたような音楽」とも言われているように、それまでの音楽史の流れからすれば突然変異であり、表現しようとしている内容も一般的には難解でしょう。



落ちてきた月を描いたCD

ブルックナーの音楽は「孤独な魂にのみ語りかける」と言われていますが、確かにその音楽は直ぐには扉を開いてくれません。そのため、音楽愛好家の中でアンチ・ブルックナーは多いと言われています。

難解な曲というと、曲の時代背景、作曲者の人物像の知識の不足、曲の表現内容が不明確などで、好きになるキッカケがないものが多いと思います。

ブルックナーはその典型で、作曲者の人物像や、時代背景などを調べ、いわば外堀を埋めてから、本丸に攻め込むようなアプローチでは、ブルックナーはなかなか扉を開いてくれません。

そのため、ブルックナーファンでも、その音楽の説明に困って、「何度も聴くうちに、ある日突然わかるようになる」とか、「ブルックナーは好きか嫌いかわからない、理解できるかできないかわからない」といった乱暴な言い方がまかり通っているようです。

4. 筆者のブルックナー開眼について

筆者は今でこそブルックナーの大ファンで、自宅の巨大なバックロードホーンで、ブルックナーを迫力のある大音量で聴くことが楽しみの一つですが、20台の半ばまでは全く無縁でした。しかし、キッカケは偶然やってきました。たまたまブルックナーの最高傑作と言われる、交響曲第8番のFM放送の予定を知り、その指揮者が筆者の好きなカール・ベームで、しかもウィーンフィルの演奏であったため、好奇心からエアチェックを試みました。長時間録音の可能な2トラ38のテープに収め、初めてブルックナーを手に入れました。

当時は学生生活の最終年の追い込みの最中でしたので、疲れて夜更けに下宿に帰り、あまり意識せずに、毎晩のようにこのテープを寝転んで聴くことが、日課になりました。ひと月あまり、居眠りしながら、聴いていたわけです。途中で寝込んでしまっても、80分を超える大曲ですので、延々と曲は続いています。

その結果、聴き損ねたところを再生したりするうちに、全楽章を何度も聴くことになりました（レコードなら、各楽章で裏返すため、そこで止めてしまうところですが）。その音楽に直観的に惹かれるものがあったこともあり、繰り返し聴くうちに、次第にブルックナーの虜になっていきました。

ブルックナーの後期の充実した第8、第9番などの交響曲は、「ロマンティック」のようなわかりやすい解説はありませんが、このような経緯で、第8番からブルックナーに入れた筆者は幸運だったと思います。

彼の交響曲は全て同じテーマを追究していますので、交響曲第8番のような最高傑作でブルックナーの扉を開き、他の曲を順に聴いて行ったのは、結果的に良いアプローチだったかもしれません。

5. ブルックナーの音楽の特徴

これまでの解説でかなり言及していますが、ブルックナーの音楽には他の作曲家には無い、いくつかの特徴があります。以下に筆者の独断と偏見も交えてポイントを書かせてください。

(1) 相性が重要

○指揮者&オーケストラ

一流の指揮者でもブルックナーとの相性が良くない場合があるようです。幅広い演奏レパートリーを持ち、ビジネスとして器用に音楽を量産できるような指揮者は、ブルックナー向きではないと言われています。

ブルックナーの本質の表現は、やはり不器用な面もあり、こだわりをもった指揮者でないと難しいのではないのでしょうか。当然ながらオーケストラもブルックナーに共感していることが求められます。

また、何でも自分流で表現するような指揮者のCDなどはいくら聴いても、共感は得られないでしょう。



○聴衆（音楽愛好家）

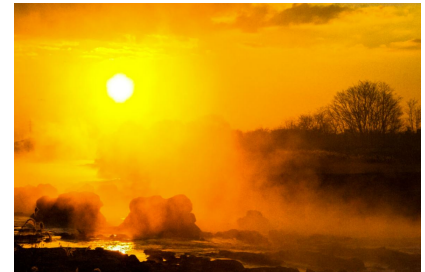
「ブルックナーは孤独な魂に語りかける」と言われることが多いです。幸福に満ち溢れ、賑やかな時間を過ごしている方や、人間にばかり興味のある方には、ブルックナーの世界は無縁かも知れません。

一方で、仕事などのストレスを抱えながらも、孤独に耐えて頑張っている人には、ただ聴くだけでもブルックナーの音楽は最高の癒しとなるはずです。

（2）作曲手法上の特徴

○ブルックナー開始

この第4番の冒頭のように、原始霧と言われる弦楽器のトレモロで楽曲が始まる手法。霧がかかる深い森に訪れる清々しい朝を思わせませす。ブルックナーの交響曲ではブルックナー開始が多用されているため、彼の交響曲は同じ雰囲気が始まるものが多いです。



原始霧のイメージ

○ブルックナー休止

ブルックナーは交響曲の場面展開の際に、経過句を流れるように描くことは少なく、ゲネラル・パウゼ（全楽器の休止）で突然、オーケストラが休止し、曲想を転換させる手法を用います。「ロマンティック」の第4楽章などでは、何度も衝撃的に登場します。

○ブルックナースケルツォ

ブルックナーの長大な交響曲の中で、スケルツォの楽章はとても聴きやすく、コンパクトです。それでいて、ブルックナー特有のオリジナリティがあふれています。またトリオの野暮ったい魅力がたまりません。

○ブルックナーリズム

2 + 3（2連 + 3連音符）、あるいは3 + 2の音型。「ロマンティック」では、このリズムが作品全体を支配すると言って過言ではありません。これが以下に述べる「反復進行」の形で、繰り返し演奏されます。



1小節を2と3に分割するブルックナーリズム

○ブルックナーゼクエント（反復進行）

ひとつの音型を各楽器が同時であったり、ずれたりしながら繰り返し、何度も演奏し、盛り上げていく手法です。シューベルトのグレイトでも多用されていて、ブルックナーはその影響を受けたのかも知れません。初めは抵抗があっても、このブルックナーゼクエントが好きになれば、もうブルックナーの扉は開かれたと思って良いでしょう。

6. あとがき

栄フィルでブルックナーを初めてプログラムに取り上げたのは、いまから十数年前。神宮先生の指揮で「ロマンティック」を演奏し、筆者はコンマスを担当しました。その当時もブルックナーファンは極少数派だったので、その後、選曲の俎上になかなか上がりませんでした。今回の選曲時の団員投票では、昨年秋の定期で演奏したシューベルトのグレイトが第1位、ブルックナーの「ロマンティック」が第2位でした。

筆者は「ロマンティック」は前に演奏したので、本来なら他のブルックナーの交響曲（特に後期の傑作）に進みたいところでしたが、その想いを口にすることは控えました。ここで解説したように、「ロマンティック」は作曲者自身の努力もあって、彼の交響曲の中では例外的に親しみやすい曲になっています。現時点の栄フィルでは、やはり「ロマンティック」がベストチョイスでしょう。

ブルックナーが作曲した当時の初心に帰り、お客様の共感を得られるような演奏を目指し、鎌倉芸術館の大ホールでの「ロマンティック」の演奏会の成功を期したいと思います。